

次の課題文を読んで、設問A、Bに答えなさい。解答は解答用紙の所定の欄に横書きで記入しなさい。

[課題文]

次のような実験場面をイメージしてください。互いに未知のAさん、Bさんがペアにされ、2人の間で1万円を分ける経済実験に参加します。実験は2つのステップで進みます。最初にAさんが実験者から1万円を渡され、「分け手」として1万円の分配方法について、Bさんに提案するように言われます。次にBが「受け手」として、Aの提案を受け入れるか拒否するかを決定します。もしBがAの分配提案を受け入れるなら双方の取り分はそのまま確定しますが、納得せず拒否した場合には、双方の取り分とも0円になってしまいます。

BはAの提案内容をいっさい変更できず、受け入れるか否かを決めるだけなので、この実験ゲームは、最後通告ゲーム (ultimatum game) と呼ばれます。実験では、このゲームをただ1回だけ、分け手、受け手の役割を交換せず、コミュニケーションなしで行います。さて、どのような分配のパターンが見られるでしょうか。

この極めて単純な実験ゲームは、経済学者や心理学者を中心に、世界各地のラボでこれまで何千回と実施されてきました。結果もまた単純明快です。日本、アメリカ、ヨーロッパなどでこの実験を行うと、Bに金額の40～50%を渡す、ほぼ平等の分配がもっとも頻繁に提案され、受け手もその提案をほぼ確実に受け入れます。20%を下回るような少額の提案はまれであり、また行われたとしても多くの場合に拒否されます。

読者の皆さんは、この結果を聞いてアタリマエと思われるでしょう。「常識的」に考えれば、そこにはなんの驚きもありません。しかし、この結果は、経済学の伝統的な「ホモエコノミクス (経済人) モデル」からすれば驚きと言えます。なぜでしょうか。

人は、他人の受け取る利得には一切関心なく、自分の利得を最大化することにしか注意を払わない「ホモエコノミクス」だと仮定しましょう。この場合、受け手Bは提案を拒否してしまえば元も子もなくす以上、1円以上のいかなる金額も受け入れるはずです。また、このゲームは匿名で、しかもただ1回しか行われないう分け手にとって後顧の憂いのない状況です (後で文句を言われたり、評判が下がったりする可能性もありません)。したがって、そのことを「読み切った」同じくホモエコノミクスであるAは、「自分に9999円、相手に1円」という分配を提案するはずで

もちろん、私たちはこうした「アンフェア」な分配が決して起こらないことを直感的に理解できます。また実験の結果も、その直感と一致しています。その意味で、皆さんは「こんな実験はやってみるまでもない」と思うかもしれません。しかし本当にそうでしょうか。

人類学者のヘンリックを中心とする研究チームは、これまでの実験ゲーム研究のほとんどがアメリカ、ヨーロッパ、日本などの大規模産業社会でしか行われていないことを問題だと考え、世界各地の15の小規模社会 (多くても人口数百名程度の部族や村落) において、最後通告ゲーム実験を

実施しました。

これらの社会は、南アメリカやアフリカ、東南アジア島嶼部^{しよ}などを居住地とする、いずれも小規模な部族・村落で、主たる生業のかたちも狩猟採集、園芸農業、遊牧などさまざまでした。実験の参加者は、それぞれの社会での約1～2日分の収入に当たる金額を分配する最後通告ゲームを、同じ村落の「匿名の相手」（誰だか分からない相手）とペアにされて、ただ1回だけ行いました。（中略）

興味深いことに、分配提案額の違いは、その社会がどのくらい市場経済に統合されているか、日常場面でどのくらい協力が行われているかといった、「社会全体のマクロな特徴」の違いによって統計的によく説明できました。たとえば、狩猟採集を主とするハッツァ族の社会では、マーケットでの交換がほとんど行われないのに対して、遊牧に携わるオルマの社会では、家畜の売買や賃金労働が頻繁に行われています。市場統合がなされているオルマの社会の方がハッツァの社会より、平等に近い「フェア」な分配提案が行われています。その一方で、年齢、性別、教育を受けた期間、同じ社会の中で比べた時の富（家畜・現金・土地）のレベルなど、一人一人の「個人としてのマイクロな特徴」の違いは、個人間での分配提案のばらつきを統計的にほとんど説明できませんでした。

このような比較文化実験は、私たちがふだん当然だと考えている分配の原理が、社会・文化レベルの要因によって規定されているという重要な事実に気づかせてくれます。「どのように分けるのが適切か」に関する分配規範は、生業のかたちを始めとする社会の生態学的な構造に依存するのです。

私たちが住んでいる産業社会ではどこで実験しても平等分配がもっとも観察されるという結果は、マーケットという特殊な文化的文脈のもとで理解できます。市場経済化が進んでいる社会ほど「フェア」な取引が文化規範となっているということです。未知の相手との取引が日常的に行われる「市場型の社会」では、誰に対しても分け隔てなく「フェア」に振る舞う個人は、信頼できる取引対象として、良い評判を獲得することができます。その一方、「アンフェア」な個人は、直近では得をしても、長い目で見ると取引相手としてほとんど選ばれなくなるでしょう。

最後通告ゲーム実験の状況を考えてみましょう。参加者は、作業量や貢献量に違いがあったわけではなく、ただランダムに受け手と分け手の立場に割り振られただけです。そのような場面で分配を行うとき、「等しきものは等しく」という「市場の倫理」が、産業社会で生きている私たちにとって、ごくアタリマエの文化規範として自然に作用します。分配の受け手も、分け手がその規範を共有していることを、「ごくふつう」に期待しています。したがって、期待に反する「アンフェア」な提案を受けたら、当然、頭に来て感情に流され、相手からの「最後通告」を断固として拒否することになります。分け手も、受け手のこうした感情の動きを予測できるので、自分の首を絞める結果に繋^{つな}がる「アンフェア」な提案は行いません。（中略）

しかし市場での取引とは無縁の伝統的な社会では、血縁や特定の相手を重視する（大事にする）

行動こそがむしろ「正義」であり、誰に対しても等しく振る舞う普遍主義者は、かえって「許しがたい不道德」な存在（集団に対する裏切り者、恩知らず）と見なされるのかもしれませんが。

（亀田達也著、『モラルの起源 ― 実験社会科学からの問い』岩波書店、2017年より抜粋。漢数字を算用数字に直し、常用漢字でない漢字には読み仮名を付した。また、図表及び図表の参照にかかる記述を省略した。）

[設 問]

- A. 課題文と同じ最後通告ゲームをAさんとBさんがするとしましょう。AさんはBさんがホモエコノミクスかどうか知らないと仮定します。AさんがBさんに「自分に8千円、相手に2千円」という提案をしたところ、Bさんは拒否して、2人とも取り分が0円になりました。Bさんがホモエコノミクスかどうか論理的に説明しなさい。また、Aさんがホモエコノミクスかどうかは、この結果からは分かりません。なぜ分からないかを論理的に説明しなさい。300字以内で記述しなさい。
- B. 市場型社会におけるフェアな分配規範とはどのようなものか、また、なぜそのような規範が発生するのか、問題文に沿って説明しなさい。さらに、フェアな分配規範が定着するためには、社会の仕組みとして何が必要だと思われますか。論理的に300字以内で述べなさい。